

宇宙船レグルス2号

—— イヤな予感

太陽系第九ステーションを出発してから七週間に及ぶ航海の末、レグルス2号はようやくビウルジヨカ恒星系の外縁がいえんにやってきた。

ビウルジヨカ恒星系は外縁をドーナツ状の小惑星帯に囲まれている。

小惑星帯から発生しているの電磁波は、思いのほか強く、そのおかげでレーダーを使って小惑星帯の向こう側を詳しく探索たんさくすることが難しい。したがって、小惑星帯の中に自分たち以外の艦船かんせんが身をひそめていたとしても、探知することはほぼ不可能である。

「うーん……イヤな予感しかしないですね。」

ゴサクが不安で顔をゆがめる。

「何がだ？」

マテウスが説明を求める。いつも根拠こんきよが必要な男。それがマテウスである。

「この小惑星帯、なんかイヤな感じですね。」

縁起の悪いゴサクの言葉だった。もちろん、①マテウスは根拠のない感情論に引きずられて判断を鈍らせるような男ではない。引き続き航行を続けるレグルス2号は、小惑星帯を少しよけるように、ビウルジヨカ恒星系の内側に向けて通過した。

強い電磁波のため、しばらくはレーダーが使い物にならない。

息を殺すような気持ちで小惑星帯を通過し、ようやくレーダーの機能が回復したとき、船内には安堵あんどの空気が流れた。

しかし、「なんだよ、何もなかったじゃないか。」と誰もが思ったそのとき、ジョージがカエルを踏みつけたようなうめき声をあげた。

「なんかいる……」

駆逐艦くちくかんらしきものが、小惑星帯の陰かげから現れたのだ。まるでレグルス2号を待ち伏せていたかのようである。

ジョージがパネルを操作しながら続ける。

「なあ、マテウス。ありや地球の船だ。地球の駆逐艦くちくかんだぞ。なんでこんなところにいるんだろう。」

②幽霊船ゆうれいせんでも見たのかと言うほど気味悪そうにジョージがマテウスに聞くのも無理はない。このビウルジョカ恒星系への派遣調査はけんは、レグルス2号に命じられたものである以上、この恒星系へ他の艦船かんせんが来ること自体が不自然である。もちろんマテウスも何も聞かされてはいない。いずれにしても、味方の船なら連絡を取るべきだ。

「よく分からないが、通信を入れてみてくれ。」

「了解りょうかい。『こちら太陽系第九ステーション所属、レグルス……』」
とジョージが通信を送ろうとした瞬間、直感が働いた。

(やばいやばいやばいやばい)

最悪な予感におろおろしているうちに、ジョージの手元にあるレーダーが、相手の駆逐艦くちくかんの船首から強いエネルギー反応を感知した。

「撃たれる！」

ジョージが叫ぶと同時に、レグルス2号の船内に、ドーンと地震のような衝撃しょうげきが襲おそった。

なんと、地球連邦政府の所属と思われる駆逐艦くちくかんが、こちらに向かって攻撃してきたのだ。

マテウスが即座に指示を出す。

「全速離脱ぜんそくりだつだ！ ジョージ、無駄だと思うがSOS信号！ ゴサク、手遅れかもしれないが防御ユニット作動させろ。」

節電のために防御ユニットを作動させてなかったことが悔くやまれるが、今はそんなことを言っている場合ではない。こちらが非武装ひぶさそうで、向こうが攻撃を仕掛けてくる以上とにかく逃げるしかない。

12 消えた駆逐艦

逃げるレグルス2号を、駆逐艦くちくかんが追いかけてくる。

くどいようだが、レグルス2号は非武装船ひぶそうせんである。そして、武装ぶそうしていない艦船かんせんを攻撃することは、『宇宙協定』に反する行為こういだ。『宇宙協定』に反した艦船かんせんは、その場で撃沈げきちんされても文句は言えないことになっている。

マテウスは攻撃を受けて大きく揺れ、けたたましい警告音けいこおんが鳴り響く船内で①考える。

今、レグルス2号に攻撃を仕掛けている駆逐艦くちくかんも、『宇宙協定』のことは承知しょうちの上でやっているはずだ。非武装船ひぶそうせんに向けて、しかも本来味方であるはずの地球の駆逐艦くちくかんが、レグルス2号を攻撃する目的があるとしたら、それは何だろう。ジョージが大声を上げながら操作パネルとモニターを交互に見ている。

「左エンジン損傷そんしょう！ 推力すいりょくダウン！ どうするマテウス？」

「どうもしない。このまま逃げろ。」

「だめだめ、逃げられない。死ぬ死ぬ死ぬ。おれたち死ぬよ、ゼツタイ死ぬ。」

マテウス、もう無理！ エンジンもたない！ でもなんか変！ 変だよ変だよ！ なんかいるよ！ 変なのがいるよ！」

「ジョージ、落ち着け。『なんか変』では分からない。」

マテウスはまだ冷静さを保っている。

「ええっと、駆逐艦くちくかんの後方に……何あれ？ なんなのあれ、冗談じゃないよ、

あんなでかい船見たことない。でかいでかい、馬鹿でかいよー何あれ？ クジラですか？」

「ジョージ！ 報告は正確に、②客観的に！」

マテウスに言われて、何とか気持ちを立て直そうとするジョージである。

「ああ、えっと。巨大な戦艦せんかんだね。たぶんだけど、幅だけでニキロメートルはあるんじゃない？ あれだよ、クジラとサンマだよ。あ、おれたちがサンマの方ね、分かる？ サンマ分かる？ クジラは③サンマをひと飲みだね。もう知らないよおれ……」

サンマと聞いたゴサクが反応する

「サンマなら、大根おろしをそえるとおいしいですよ。皆さん食べたことあります？」

「食べたことあるぜ。ジャパニーズ・レストランでな。ありやうめえもんだ。」

キリルは片手で船を操縦そうじゆうしながら、もう片方の手に酒の瓶を持っている。

「なあ、マテウス。一応操縦そうじゆうしてるけど、エンジンぶっ壊れてあまり意味なさそうだぜ。」

レグルス2号を攻撃している駆逐艦くちくかんの後ろに現れたのは、駆逐艦くちくかんの二十倍はあろうかという巨大な戦艦せんかんであった。ジョージがクジラにたとえるのももつともであり、そして地球のものではないことは確かだ。

「駆逐艦くちくかんに巨大戦艦きょだいせんかん。もうだめだ……。」

ジョージはふらふらとキリルに近づいていった。

「キリル。酒くれ。おれも飲む。」

「ぼくももらいます。どうせ死にますし。」

ゴサクまでもが、キリルから酒をもらい始めた。

「短い人生だったな……。」

酒盛りを始めた三人に、あきれたマテウスが

「お前ら、持ち場を離れるな！」

と言うが、

「だって、あのくちくかん駆逐艦おれたち殺す気まんまんだよ。おまけにわけのわからない

いきょだいせんかん巨大戦艦だよ。もうマテウスも一緒に飲もうぜ。」

と④三人はすでに諦めあきらムードである。

「こんなところで死ぬなんてよ。誰もおれたちの骨なんて拾ひろってくれないんだろうな。」

「ああ、死ぬ前にもう一回、サンマの塩焼きが食べたかったなあ……。」

酒をぐびぐびやりながら、くだらないことを言い合う三人であった。

しかし、よく考えたら、いつの間にか攻撃が止んでいるようだ。

ジョージがレーダーとモニターにかけよって状況を確認する。

「え、おい、ちよ……。」

「どうした、ジョージ」

「くちくかん駆逐艦が、消えた……。」

13 忙しいやつら

駆逐艦くちくかんが突然姿を消したということは、可能性としては二つしかない。どこかへ行ったか、撃沈げきちんされたかである。そしてこの場合、あの巨大戦艦きょだいせんかんに撃沈げきちんされた可能性が極めて高い。マテウスは、これから起こり得るあらゆる事態について頭の中で想定しているが、あれこれ考える間もなく、①巨大戦艦きょだいせんかんがレグルス2号に接近してきた。

レグルス2号に通信が入る。

『「こちらはメルグ共和国しよぞく所属、第十三戦闘艦艦長せんとうかんかんちよう、リアーナ・チャマトである。貴艦きかんの救助要請きうすいに応じる。」だってさ。おれたち助かったかもだぜ。』

ジョージが安心しきってその場にへたりこむと、キリルとゴサクが手に持っている酒のグラスをカチンと合わせて乾杯かんぱいをした。死ぬ覚悟かくごで飲んでいた酒が、今度は命が助かった祝い酒に変わったのだ。

巨大戦艦きょだいせんかんの船底の大きなハッチが開くと、誘導ビームゆうどうが伸びてレグルス2号につながる。

レグルス2号はメルグ星人の巨大戦艦きょだいせんかんによって救助されることになった。

こちらの救助要請きうすい、つまりSOS信号は無駄にならなかった。

巨大戦艦きょだいせんかんの中はやはり巨大である。ちよっとしたドーム野球場の広さもあるかと思われる空間に、メルグ星の戦闘機せんとうきが、その数は数百になろうかと思われるが整然と並んでいる。

収容されたレグルス2号の周りに、もの珍しそうに整備士やパイロットたちが集まってきた。メルグ星人は、相変わらず背が低い。

背が低いのに、馬鹿にでかい戦艦を作るもんだとジョージはくだらないことを考えている。

そのうちに、将校らしき者がやってきて、自動翻訳機を通して四人の乗組員に挨拶すると、そのままブリッジに案内してくれた。

四人はブリッジでこの巨大戦艦の艦長と面会することになった。

白いひげをたくわえた、尊大そうなじじいがマテウスたちと視線も合わせないまま言葉を放った。

「艦長のリアーナ・チャマトである。貴殿らの無事を祝福する。」

(アマトリチャーナだど?)

「今何か言いました?」

小声でゴサクがジョージに聞くと、ジョージは小さく首を横に振った。

相手艦長に対しては、マテウスがきっちり敬意しながら答える。

「この度は、救助いただきありがとうございます。」

リアーナ・チャマト艦長は、マテウスの敬礼をちらりと見た後にうむとうなずき

「貴殿らを攻撃していた艦は、地球軍のものだと思いが、②なぜ攻撃を受けていたのか?」

と当然の疑問を口にする。

「それが、全く原因が分かりません。我々は、先日メルグ共和国と結ばれたこの星域せいいきに関する仮協定もとに基づき、再調査の命を受けてここまで参りました。

また、先ほどの駆逐艦くちくかんは、こちらが通信をかける前に攻撃してきました。したがって、攻撃の動機も不明であり、所属する艦隊かんたいも不明です。」

「なるほど、では撃沈げきちんする前に私が所属しよぞくを確認すべきであったか。」

リアーナ・チャマトは、無表情のまま③衝撃しようげき的なことを口にした。

「げ、やっぱり撃沈げきちんしちゃったの?」

キリル、ジョージ、ゴサクの三人は改めて驚くが、リアーナ・チャマト艦長かんちようはまったく動じていない。視線は前方を見すえたまま言葉を続ける。

「貴殿らの艦は、明らかに非武装ひぶそうである。したがって、あの駆逐艦くちくかんの行為は、宇宙協定第六条違反いはんとみなし、即時撃沈そくじげきちんした。何か問題あるか?」

当然のことをしたまでと言いたげである。

「閣下かつかの仰る通りおっしやです。我々は非武装ひぶそうであり、攻撃は宇宙協定第六条違反いはんしております。何も問題ありません。」

マテウスは冷静に、そして丁寧ていねいに返答する。

それにしても、即時そくじに撃沈げきちんしなくてもよいのではないか。この巨大戦艦きやだいせんかんがある駆逐艦くちくかんを攻撃するには、あまりにも戦力の差が大きすぎる。警告けいこくを発し

て武装解除ぶそうかいじよさせ、捕獲ほかくして尋問じんもんする手もあったのじゃないか。たしかに、『宇

宙協定』では、違反いはんした艦船かんせんは、その場で殺されても文句は言えない。しかし、

違反いはんしたと言っても、その船に乗っている多くの乗組員は上官じようかんの命令に従っ

ただで、罪は『宇宙協定』に反する命令を下した責任者だけが問われるべきで、やはり有無を言わず撃沈するのはやりすぎだ。

恐らく、マテウスを含むレグルス2号の四人は④同じこと思っていたらう。

しかし、

『救助してもらった立場で、撃沈げきちんに関してあれこれ言うのは失礼だ。』

のように常識的な考えでいたのは、もしかしてマテウスだけだったかもしれない。

ということ、あまり酔っぱらっていないキリルが巨大戦艦きよだいせんかんの艦長かんちように向かって食ってかかった。

「うん、やっぱ許せんわ。あのさ、艦長かんちようさんよ。助けてもらってこんなこと言うのもなんだけどね。あんたやりすぎだよ。やりすぎ。あんたが殺した乗組員の中には、仕方がなく命令に従ってただけっていうのもいるわけ。」

「ちよ、おい。キリルやめ……」

マテウスが止めようとするが、キリルはマテウスの口をふさいで続ける。

「リアーナ・チャマトさんだっけ？艦長かんちようやってりゃ分かるよね。あの駆逐艦くちくかんの乗組員たちにも親とか家族とかあるわけ。秒殺することないよねえ。他に方法なかったの？ あったよね、艦長さん。ねえねえ、バカなの？ 死ぬの？ メルグ星人せんかんの戦艦かんちようの艦長かんちようってバカしかなれないの？ それともあ

んたが単独でバカなの？ あゝあ、いっぱい死んじゃったよねえ。殺したの
あんだだよねえ。たしかに、おれたち攻撃されてたけどさ。あいつら殺して
くれなんて思っていないし。『殺してくれてありがとう、マンモスうれぴいな
◆』なんて思っていないし。どうすんのよあれ、かわいそうに。なあ、ジョー
ジ、お前もそう思うだろ？」

ジョージは、うなずいて相手艦長の顔に視線を移す。一方、マテウスは頭
を抱えた。

そして、このキリルの言葉は、自動翻訳機を通じてブリッジにいるメルグの
乗組員たちにもしっかりと聞こえてしまっている。ブリッジの空気はすでに
凍り付いていた。その場にいるメルグの乗組員たちは、互いに顔を見合わせな
がら、気まずい雰囲気をかもし出している。

リアーナ・チャマト艦長は、顔を紅潮させてふるふる震えている。

「レカーゼプ！」

と鋭い声ですぐ側にいた副官を呼んでこう言った。

「見ての通り、この者たちは私に敵意を向けた。艦長である私への敵意は、
わが軍への敵意とみなす。よって、この四名を制圧し、今後は捕虜として扱
う。確保しろ。」

この艦長の一声によって、マテウスたちはあつという間に銃を構えたメ
ルグ星人の兵士達に取り囲まれた。

キリルは、

「敵意？ やっぱりバカだったか。」

と吐き捨てたあと、マテウスに頭をはたかれていた。

そのまま四人は、戦艦の中の殺風景なひと部屋に連行され、外から鍵をかけられた。どうやらしばらくはこの部屋に監禁されることになったようだ。

先ほどは、味方の駆逐艦に攻撃されて命拾いをしたと思ったら、数時間後にはメルグ星人の戦艦の中で捕虜となっていました。いやはや忙しいやつらである。

14 南無阿弥陀仏

捕虜ほりよとは、捕らえた敵の軍人のことである。宇宙協定において、捕虜ほりよの扱いは人権保護じんけんほごの観点から細かく定められており、虐待禁止ぎやくたいはもちろんのこと、最低限度の衣食住が確保されなければならない。

生まれて初めて捕虜ほりよという立場を味わうレグルス2号の四人は、一体どんな扱いを受けるのかと心配していたが、部屋がやや狭いせまことを除けば、他は大体において普通であった。食事はうまかったし、望めば酒も出る。

監禁部屋かんきんに入れられてから、マテウスはずっとむっつり顔で無口をつらぬいている。駆逐艦くちくかんを撃沈げきちんしたことについて、あの場で何も言わずに黙だまっていたれば何事もなかったのに、キリルが余計なことを言ったばかりに、四人全員が捕虜ほりよとなってしまうた。まさに『(ー)』のお手本のような有り様である。しかし、マテウスがこの件に関して無言をつらぬく理由は三つある。

第一に、「A」のことだ。「A」は、「B」の言いたいことは大体わかっていいるだろうが、一ミリも反省することはないだろう。あの場面で艦長かんちょうに食ってかかったことをたしなめても、どうせ「おれは間違ったことは言っていない」と言い張るにちがいない。

第二に、「C」のことだ。「C」は、「A」が言わなければ自分がビシツと言ってやろうと思っていたに決まっている。むしろ、「A」に先を越されたことを後悔しているくらいだろう。だから「C」は、この件

についてはキリルの味方である。つまり、この件で言い合いを始めたら、数の問題だけならば二対一でマテウスの負けになる。

第三に、「B」自身についてだ。たしかに、捕虜ほりよになってしまったことに腹は立つが、「B」だって内心ではキリルの意見には賛成だ。キリルは正しい。間違っていない。キリルの意見に心のどこかで賛同している自分がいる限り、キリルを徹底的に責めるせことはできかねることは自覚している。

以上の三点により、マテウスはこの件については黙だまっていることにしたのだ。

しかし、腹は立つ。これはしょうがないことである。

何に腹が立つのか。

まず、相手の艦長かんちように腹が立つ。ちよっとこちらが駆逐艦くちくかんの即時撃沈そくじげきちんを批判ひはんしたからと言って、それを「わが軍への敵意と見なす」なんて言って、いきな

り捕虜ほりよはないだろう。こんな大きな戦艦せんかんの艦長かんちようをやっている、①「批判ひはん」と

「敵意」の区別もつかないのならあきれるばかりだ。しかし、あの艦長かんちようだっ

て本当はそんなことは分かっているだろう。生意気な地球人に対する仕返し

として、我々を捕虜ほりよにしたのに決まっている。元々、例の駆逐艦くちくかんが宇宙協定に

違反いはんしていると見るやいなや、即刻撃沈そくじげきちんすることをためらわないような人物

である。気分を害する虫けらどもを捕虜ほりよにして、艦長かんちようの自分に向かってたて

ついたことを後悔させてやろうという内心が、マテウスには手に取るように

分かる。要するに、リアーナ・チャマト艦長かんちようは、いけ好かないサイコパス野

郎なのだ。

そしてマテウスの腹立ちポイントその二は、キリルである。いくらキリルの意見が正論であると言っても、相手はこちらを救助してくれて、しかも初対面の、異星人の艦長である。そんな相手に、いきなり食ってかかるキリルはぶっ飛んでいるという他ない。正しいからと言って、時と場合をわきまえずにそれを主張し続けることは、時に自分の立場を危うくすることは明らかだ。それともキリルは、あまりにも頭が良すぎるので、頭の中のネジが何本か抜けているのだろうか。言いたいことも言えないくらいなら、死んだ方がましだと思っているのだろうか。キリル自身がそういう信条に従うのは結構だが、巻きぞえをくろうこちらの身にもなってほしいものである。

そんな風にもんもんと考えを練り広げるマテウスの横で、ゴサクが何やら手を合わせながらブツブツとつぶやいており、それをもの珍しそうにジョージとキリルが眺めていた。

「おい、ゴサク。さっきから何をやってる?」

不思議そうにジョージが聞く。

「ああ、死者がたくさん出たので、成仏じょうぶつできるようにお経きやうをあげています。」

「ジョーブツ?」

「オキョー?」

ジョージとキリルは不意打ちをくらったゴリラのような顔になった。

「人が死んだら、魂が残りますよね。その魂がちゃんとあの世へ行って、こちらに残らないように、お経きやうを読んであげます。」

「魂が残る?」

「まさか!」

信じられない様子のジョージとキリルである。だが、監禁部屋かんきんでの退屈たいくつのぎには面白そうな話題だ。

「じゃあ、魂があるとして、そいつがあのだ世に行ったらどうなるんだ?」

「そりゃ天国か地獄に行きますよ。ジョージさん、何にも知らないんですね。」

「まてまてまてまて……おれは、神を信じたら天国へ行けるとい話は聞いたことがあるが、魂っていうのはなあ。」

「おれもジョージと同じだ。そいつはなんていう宗教だい?」

ジョージもキリルも信仰する宗教を持っているわけではないが、相手の宗教観を知るとは、相手の行動原理を知ることにもつながる。聞いておいて損はない。

「お経きやうは仏教ですよ。宗派しゅうはによっていろいろな種類のお経きやうがあるみたいですが、自分が知っているのはこれです。」

「じゃあ、ゴサクは仏教を信仰しているんだな。」

「いいえ、別に……」

即答するゴサクに、②ジョージもキリルも大混乱である。信仰していない宗教の経典きやうてんを唱となえるとは何事か。イスラム教を信仰していないのに、コーラン

を唱えるようなものではないか。キリスト教を信仰していないのにアーメンと祈りを捧げるようなものではないか。

「信仰してないのに、お経きやうを読むの?」

「自分の信仰なんて関係ないですよ。人が死んだら、お経きやうをとなえます。魂がああの世に行けるようにね。」

ゴサクの言葉を受けて、キリルが論点をまとめる。

「ええと、つまり、ゴサクは仏教を信仰してはいないけど、あの駆逐艦くちくかんの死者たちをとむらうためにお経きやうを唱えている。しかも、そのお経きやうをとなえると、死者の魂がああの世に行けるといことだな。」

「さすがキリルさん。そういうことです。しかし、自分がお経きやうをとなえたからといって、死者の魂がああの世に行くかどうかは、本人次第のようです。」

「なるほど。しかし、魂があるとしても、こんな辺ぴな宇宙の片隅かたすみに、好んで残るような奴はいないだろう。みんなああの世に行ってくれるさ。」

「それもそうですね。それならば、お経きやうのあげがあるというものです。

ナムアミダブツ、ナムアミダブツ……」

「ナムアミダブツ、ナムアミダブツ……」

いつの間にか、ジョージとキリルも一緒になってお経きやうをあげていた。

15 メルグ星のマルゲリータ

メルグの戦艦^{せんかん}は、四人を捕虜^{ほりよ}にした数日後にメルグ星に到着した。

到着後、レグルス2号の四人は、軍の宿舎のようなところへ連れて行かれ、そこにしばらくいるように命じられた。

捕虜^{ほりよ}という立場は解かれていないため、勝手に出かけたり、通信したりすることは禁止されている。代わりに食べること飲むことは自由だった。料理もでききる。

監視役^{かんしやく}として、カート・レパスという無口な男がついた。

(ペスカトーレかよ。)

と思ったジョージに、

「今、何か言いました?」

とゴサクが聞いたが、ジョージはいや別にとロゴもる。

そのジョージだが、さっそくカートに頼み事をしていた。

「あのね、カートさん。小麦粉って分かる? 白い粉だよ、いやいやそうじゃない、料理に使うんだよ。そうそう。それとね、チーズって分かる? ミルクを固めた食べ物で、熱を加えるとトロトロするの。あと、バジル………は無いかな。」

ようするに、ジョージはピザの材料がほしいのだ。

カートがあちこち走り回って材料をそろえてくれた。星はちがっていても、

似たような食材はあるらしい。

材料がそろうとジョージは早速にピザ作りにとりかかるのだが、台所の調理器具が地球のものとは勝手が違う。ジョージは、カートをつかまえて調理器具の使い方をあれこれ教わっていた。

おいしいピザを焼くには、温度が決め手となる。本来ならば高温の石窯いしがまでさっと焼くのが理想である。ジョージは、なんとかそれに似た火加減を再現するために、カートを質問攻めにしていった。

地球とメルグ星では、温度の単位が違う。理想の温度をなんとか伝えるために、ジョージはあれこれ表現を工夫していたが、結局一番よく伝わったのは、

「水が沸騰ふっとうする温度の四・八倍」
という表現だった。

幸い、メルグ星人も食べることは大好きなようで、ジョージが熱心にピザについての豆知識を語ると、カートもふむふむと興味深げに聞いているのがはた目に見るとなんととも言えずおかしな光景だった。

「地球という星にはイタリアあって国があって、ピザはその国の伝統料理なんだ。ええと、今から約二千年前に、イタリアのナポリという場所で、『真のナポリピッツァ協会』というのが創設そうせつされてだな。そこでピザの理想の焼き加減が決められたんだ。おれは、真のナポリピザを極めるために、その焼き加減に合うように、レグルスのオーブンを調整してあるんだが、まあ、あれだね、①このオーブンでうまく焼けるかどうかは、やってみないと分から

ない。とにかく、細かい温度設定と、秒単位での焼き時間の管理が重要だ。

レグルスのオーブンだと、約七十秒で焼き上がりなんだがね。表面が少しこげて、パリツとして、それでいて中はふんわり。目玉が二倍の大きさになるくらいうまいんだぜ……」

と、ジョージのピザ談義を全て紹介していると紙が何枚あっても足りないの
でこの辺にしておくが、その話をうなずきながらずっと聞いているカートと
いう青年は、うなずきすぎて首がもげるんじゃないかというぐらいジョージ
の話の聞き続けていた。

語りながらピザ生地をこねていたジョージは、やがてオーブンの温度調整
をする。ザにソースとチーズをトッピングし、焼きの工程に入る。ここからは
あつという間である。約一分でピザは焼き上がる。とてもおいしそうな、よい
香りが部屋の中に充満する。

ジョージは、手早くピールをあやつり、オーブンの中のピザを皿にのせると、
熱々のうちにナイフで切り分けた。ピザカッターが無いのが残念だが、そうそ
うぜいたくばかりも言ってもらえない。

「おお、うまく焼けたね。こんなところまで来て、ピザ焼きとはさすがジョー
ジだ。」

ピザの焼き上がりに合わせてキリルが近づいて来た。

「こんなところだからこそ、ピザを焼くんだ。他にやることないんだもん。と
ころで、このピザはお客さん用だ。キリルのはこれから焼いてやるよ。」

ジョージはそう言うと、カートの前に皿を置き、

「食べてみなよ。」

とすすめる。

すすめられたカートは、一瞬たじろいだ。カートは、四人の監視役としてここにいたのであって、ピザをごちそうになるためにいるわけではない。

カートの内心の戸惑いとまじを察知したのか、ジョージが声をかける。

「カートさん、難しいことは食ってから考えなよ。せっかくの焼きたてが冷めちまう。②この一枚はカートさんのおかげで焼けたようなもんだ。」

説得に押されたカートは、一切れ手にとって、おそろおそろ口に運んだ。

一切れほおばったカートは、ピザを口にしたまま目を見開いてジョージの顔を見る。

(なんだ、このうまい食い物は?)

と目が語っている。

「ほら、うめえだろう。目玉が二倍になりやがった。腹一杯になるまで、どんどんやってくれよな。」

ジョージは鬼の首を取ったように笑う。そして、カートがピザを平らげるのを見つめていた。カートは無言で一枚食べきった後に、やっと感想を言った。

「これはなんとも……おいしいものですな。自分はピザというものは初めて食べましたが、おそろしくおいしい。おいしすぎて脳みそがとろけるかと思いました。おかわり、いただけますか。」

「もちろんさ」

ジョージのピザは、宇宙を平和にするのであった。